

# アルギュラ・フォン・グルムバッハと聖書

伊勢田 奈 緒

## 1. はじめに

アルギュラ・フォン・グルムバッハ (Argula von Grumbach:1492 ~ 1556 ? 1557 ?) はプロテスタントの最初の女性ライターであり、恐らく、彼女は論争のために印刷術を利用し、いくつものタブーを破った最初の女性政治記者であった。彼女は宗教改革においてマルティン・ルターが主張した「聖書のみ」の原則を支持し、彼女自身の聖書解釈を試みながら、当時、権威をもつ教会、大学、皇帝、帝国議会などに対して、社会・慣習などの不条理、教会の腐敗、不正義、信仰の問題などについて、堂々と公言した。その方法は主として印刷媒体であり、彼女は8つのパンフレット (小冊子：尚、すでに全パンフレット (小冊子) 拙者翻訳済み) を出版し文書活動を行った。先駆的な方法で、彼女は多くの同時代の人々によって認められ、周辺女性達の沈黙を破ったが、彼女自身は平信徒で、修道院や大学で聖書解釈の正式な教育を受けているわけでもない。にもかかわらず勇気をもってルターの運動を支持し、自身もこの運動に率先したのだった。この論文<sup>1</sup>ではアルギュラ・フォン・グルムバッハの聖書との取り組み、解釈を見ながら、彼女にとって聖書が果たした意義について考察したい。

## 2. アルギュラの用いた聖書と聖書箇所

アルギュラの全著作から、彼女はほとんど聖書全体を暗記してしまうほど、聖書を自分のものにしていただけと推察できる。しかしその反面、彼女は記憶を重視する傾向があり、しばしば自分の記憶から聖句を引用していて、その言い回しがいまいなものになっている。先ず、彼女が使用していた聖書を特定することができるか考察してみよう。アルギュラと聖書との出会いは早かった。彼女の家はバイエルンの貴族であるシュタウフ家で、彼女は家に独自の祈祷書がある程の敬虔なクリスチャンホームで育った。彼女が10歳の時、父は美しく高価なコベルガー (Koberger) 版の聖書を与えたという<sup>(1)</sup>。故に先ず、彼女は少女時代からコベルガー版聖書に慣れ親しんでいたことが考えられる。

16世紀初頭、民衆がラテン語の聖書を持ち、読み、理解することはまず不可能だった。ゲーテンベルクの印刷術の発明後、間もなく (1455年) 公刊したのもラテン語の聖書であった<sup>(2)</sup>。それから約10年を経て1466年にシュトラズブルクから初めてドイツ語の聖書が公刊され、以後、ルターが1522年に新約聖書を翻訳するまでに、高地ドイツ語<sup>2</sup>地域で14種、低地ドイツ語地域で4種の印刷聖書が刊行された。アルギュラの出身から考えると彼女の用いていた聖書は高地ドイツ語聖書

であると考えられる。1475年、『ビブリア・ゲルマニカ』をアウグスブルクでギュンター・ザイナー（Günther Zeiner）がラテン語聖書『ウルガータ』に従って忠実に訳し、1477年には再版した。1477年には『ビブリア・ドイチュ』がアウグスブルクで、アントン・ゾルク（Anton Sorg）によって印刷され、1480年に再版された。1483年にニュルンベルクで『ビブリア・ドイチュ』がアントン・コベルガー（Anton Koberger）により印刷された（これを本論文ではコベルガー版聖書とする）。以上のドイツ語聖書は、ラテン語聖書『ウルガータ』からの重訳であり聖書原典の意味を点検するようなことはなされていなかった<sup>3</sup>。しかし、アルギュラの時代、ラテン語聖書から翻訳されたドイツ語聖書の中では、コベルガー版聖書が、ザイナー版聖書以来の大きな改訂版であり、語法というよりも文体が改定され想定が美しいので一般的に（特に若い女性には）よく読まれたようだ。アルギュラはこの聖書の挿絵の非常に美しい点や叙述の巧妙さ、たとえば、ユディトがホロフェルネスを殺すという叙述にも感動している。

アルギュラは15、6歳の時、バイエルン公の母であり、マクシミリアン皇帝の姉妹であるバイエルン大后妃クニグンデの女官としてバイエルンの宮廷に送られた。敬虔なクリスチャンであった大后妃のもとで、アルギュラは十分な教育をうけ教養を身につけ、美しいドイツ語を使えるようになった。しかし、ラテン語は学ぶ機会がなかったので、ルター訳の聖書を手にする前は、彼女が使用していた聖書は10歳の時から愛読し、当時、普及していたコベルガー版聖書だったと想定される。また、アルギュラ自身、『インゴルシュタット大学宛て書簡』に「41年前に作られた」と証言しているので、当時もこのコベルガー版聖書を用いていることがわかる。

さて、ドイツ語聖書はルターが翻訳する前から存在していたのだが、ルター訳聖書が評されるのはそれがラテン語からの重訳ではなく、はじめて新約聖書はギリシア語の原典から、旧約聖書はヘブライ語の原典から訳出された点にある。当時、ドイツ語は各地の方言に分かれていたが、その状況にあってルターはこなれた訳文をもって、また特別な方言を使うのではなく、高地の人も低地の人も共に通用するドイツ語を使用した。ルターの激しい批判者であったコヒロウス（Johann Cochläus）は「女もほかの単純なばか者たちもこの新しいルターの福音書を胸中におさめて持ち歩き、それを暗唱している」と評しているほど、ルターの聖書は民衆に親しみやすい文体が使われていたようである。ルターは母国語による聖書を通して人々の心に生きた言葉で福音を伝えることに熱心であったのである。さてアルギュラも、聖書の翻訳者としてのルターの著作から非常に得るものが多かった<sup>4</sup>。また、彼女は著作から分かるようにヴァルトブルク城に保護されていた1521年12月から1522年2月までの11週間で翻訳したというルターの新約聖書を読んでいた<sup>5</sup>ことは明らかであるし、さらに1523年刊行された旧約の「モーセ五書」の訳も知っていた<sup>6</sup>。彼女は自分で、古い訳を捨てルター訳聖書を用いて編成を試みたようである<sup>7</sup>が、しかし、彼女の著作を通じて言えることは、それ以前の、彼女が空で覚えているほどの、古い訳のドイツ語聖書（コベルガー版聖書）に頼り続けていたことは間違いないことである。

アルギュラの著作における聖書引用箇所をみると、291回の聖書についての言及のうち、旧約聖書からはモーセ五書から6回、歴史書から2回、詩編から20回、イザヤ書から34回、エレミ

ヤ書から 28 回、エゼキエル書から 13 回、ホセア書から 8 回、ヨエル書から 3 回引用している。特筆すべきは彼女の全著作の多くが黙示録の基調であるが、ダニエル書やヨハネ黙示録についての引用がないことである。また外典のユディト記の 2 回と、バルク書の 1 回の言及があることも特徴である。また新約聖書についてはマタイによる福音書は 59 回も引用され、特に同福音書の 10 章は 22 回も引用されている。マルコによる福音書からの引用はわずか 3 回であるが、ルカによる福音書から 22 回、ヨハネによる福音書から 32 回引用している。使徒言行録からは 7 回の引用であり、パウロのテキストからの引用は、コリントへの信徒への手紙一から、17 回、コリントへの信徒への手紙二から 6 回で、コリント信徒への手紙からの引用が圧倒的である。またローマの信徒への手紙から 6、とガラテヤの信徒への手紙から 5 回の引用がある。パウロの他のテキストからはエフェソへの信徒への手紙の 4 回の言及がある。その他、ペトロの手紙一からは 6 回、ヨハネの手紙一からは 2 回の引用がある。全体的に見て詩編、イザヤ書、エレミヤ書、マタイによる福音書からの多くの引用は、しばしば繰り返されているが、一方、パウロの全文献は、単発で引用されている。以上のことから、アルギュラはルター訳の聖書よりもコベルガー版聖書を使用し、彼女の関心は預言書と福音書にあったと推察できる。

### 3. 「インゴルシュタット大学宛の書簡」<sup>8</sup>からの聖書の使い方

アルギュラがどのように聖書を用いて宗教改革運動を推し進めていったかを彼女の著作「インゴルシュタット大学宛の書簡」から具体的にみてみよう。

この書簡はアルギュラが 1523 年 9 月 20 日にインゴルシュタット大学の教授会にあてて、書いた痛烈な抗議文である。それは、神学的見解の撤回を強制された若い講師アルザシウス・ゼーホーファを支援するためだった。この書簡の趣旨は、自分はパウロが「女は教会で沈黙すべきである。(テモテによる福音書 I 2 章 2 節)」と言っているのを知らないわけではないが、だれも男性が発言しようとしないので、「一人の前でわたしを受け入れる者を、わたしもまた、天にいますわたしの父の前で受け入れるであろう。しかし、人の前でわたしを拒む者を、わたしも天にいますわたしの父の前で拒むであろう。」(マタイによる福音書 10 章 32～33 節) という聖書箇所を根拠に、自分が大学へ出向き、彼らとドイツ語で討論したいというものである。

彼女が言及しているアルザシウス・ゼーホーファは 1503 年頃にミュンヘンで生まれ、インゴルシュタット大学とヴィッテンベルク大学で学んだが、ヴィッテンベルク大学では、メランヒトンのもとで、信仰による義の福音を学び、また過激派のカールシュタットの影響も受けた。その後、インゴルシュタット大学で学び始めた 18 歳の彼は、ヴィッテンベルク大学とは全く雰囲気も、神学の解釈も異なる大学に馴染めず、大学をやめようと思うのだが、彼の家族によりインゴルシュタット大学に在籍するように説得され学位をとり、さらに同大学で、教え始めた。当時、インゴルシュタット大学の實力者は、ルターの不倶戴天の敵で弾劾者であったヨハン・エック<sup>9</sup>であり、彼はルターの教説を異端視していた。ルターやメランヒトンに心酔していたゼーホーファは、インゴルシュ

タット大学においてパウロ書簡の講解を行ったのだが、その解釈がルター的解釈であったために、異端の嫌疑を受けることになった。彼は取調べを受け、一方搜索された彼の宿舎から、メラニヒトン、ルターの著作が発見された。彼は3度投獄され、司教に渡されると火刑になるところだったが、父親のたつての頼みによりバイエルン公と大学が責任をとるということになった。ゼーホーフは火刑を恐れるあまり、公にその所信を撤回することになる。その後、彼は人里はなれた修道院<sup>10</sup>に監禁されることになった。

アルギュラのこの著作は「序文」とアルギュラによる「インゴルシュタット大学宛の書簡」とゼーホーフが大学側に誓約した「条項」から構成されている。先ず序文の執筆者は特定できないが複数の人物が候補にあげられる。すなわち、インゴルシュタットで学びアルギュラが宗教改革運動思想や息子の教育などを相談するほど親しかったオジアンダー (Osiander, Andreas 1492-1552)、フランシスコ修道会に入っていたが1521年ルターの感化で修道会を去り、ルターの同労者となったエーバリン (Eberlin, Johann 1465-1533)、インゴルシュタットでヨハン・エックの下、神学博士号を得たがツヴィングリやエコランバーディウスの宗教改革に共鳴しやがて再洗礼派を支持するフープマイアー (Hubmaier, Balthasar 1485-1528)、信徒神学者で特に農民戦争の綱領宣言書「12条項」の起草者として知られるローツァー (Lotzer, Sebastian 1490-1525) である。以上の者達の共通点はいずれもアルギュラの行動を十分認識し、また彼女のパンフレットのいくつかを読んでいたらとされることである。

序文で著者は、インゴシュタット大学の聖書学者たちをユディト記の8章の、偽預言者たちのように批判し、アルギュラのゼーホーフ事件での行動については、「このことは、信じられないことであり、女性にはまれなことであり、全く、私たちの時代には前代未聞のことである。」とし、さらに、彼女は聖書学者の前に出て、彼らに質問を受けようとしていることを伝え、彼女の勇気を絶賛している。またルカによる福音書19章から「もし、子どもたちがものを言わないなら、石が叫び出すであろう」の箇所やヨエル書2章の「この時の後、私はすべての人に私の霊をそそぐ。そして、あなた方の息子や娘は預言する。彼らは知恵の言葉を語る。僕である男女にも、私の霊をそそぐ。そして私は天と地に奇跡を行う。主の日、大いなる恐るべき日が来る前に」の箇所を引用してアルギュラの行動を圧倒的に支持している。序文執筆者は、アルギュラの著作は聖霊によって導かれているものとし、さらに、聖書の中の女性たちの姿—エステル記4章の、人々を救うために死と破滅に直面したエステルや、また真実について黙っていることで神に反対して罪を犯すよりも、自分がなすべきことのために男性に捕えられることを選んだ聖なるスザンナ (ダニエル書補遺スザンナ)—をアルギュラの姿になぞらえて称賛している。最後に、ユディト記9章の聖句「主よ、もし一人の女性の支配によって彼らを負かすなら、貴方の名は誉められるであろう」を用いながら、アルギュラの行為を神に祈り、全面的に彼女の活動を推奨している。以上、アルギュラと同様、序文執筆者は聖書 (外典のユディト記、ダニエル書補遺スザンナとエステル記など) をたくみに用いてアルギュラ支持を表明している。

アルギュラ自身の本文は、ヨハネによる福音書12章の引用から始まっている。すなわち、「私を

信じる者がだれも暗闇の中に留まることのないように、私は光として世にきた。」を引用し、この光は私たち全ての中に住みつき、冷淡で見る目のない全ての心を照らすことが、彼女の願いであることを告げ、神の前で自分がこの公開書簡を示すことを宣言している。彼女は、女性である自分が公に語り、討議することの理由として、マタイによる福音書10章「他の人の前で、私に告白する者は誰も、私も、天の父の前でその人を私の仲間であると告白する」や、ルカによる福音書9章、「私と私の言葉を恥じる者はみな、私が栄光に輝いているときにその者を恥じる。」などを用いる。そして、キリスト者は誰でも、すなわち女性は男性と同様にキリストに公けに信仰告白が出来、不正に対してそれを非難することができるのだとする。エゼキエル書33章「もしあなたがあなたの兄弟の罪を見て、彼を非難するなら、私は彼の血の責任をあなたの手を求める。」や、マタイによる福音書12章「聖霊に反対する罪は、決して忘れられない、今も、永遠も許されない。」、また、ヨハネによる福音書6章「私の言葉は霊であり命である・・・。」を用いながら、行動を起こさなければ、それは、聖霊に対して罪を犯すものであり、だからこそ、キリスト者である自分が立ち上がったのだと表明する。

続いて大学側に対して、アルサシウス・ゼーホーファ事件において、ゼーホーファに投獄と火刑という暴力と強制をもって信仰告白を否定させ、この目的のために聖書を誤用することはキリストに反することではないかと弾劾する。信仰の問題において神のみが畏れられるべきであって、個人の信仰の邪魔をする者はだれも—それが皇帝であれ、教皇であれ—公然と反対すべきであると語る。また大学側に対して、「あなた方、堂々とした専門家たちよ」と呼びかけ、ルターやメランヒトンと論駁しないで非難することの卑怯さを訴える。また、もしルターやメランヒトンの著作を否定するのなら、神と神の言葉を否定することになり、それは神に対する永久の背きであると告げる。マタイによる福音書10章の「あなたがたの身体を奪う者を恐れるな、その者の力は終わりになるから。しかし、魂も身体も地獄で滅ぼすことができる者を恐れなさい。」を挙げながら、キリストや彼の使徒や預言者が、人々を牢屋に入れ、彼らを焼いたり、殺したり、あるいは、逃亡したりする聖書箇所を見つけられないとする。次に大学関係者に対して、「あなた方はエレミヤの第1章を読んだことはなかったのですか？」と問いかけ、エレミヤの召命体験における2つの幻をあげる。最初の幻、アーモンドの枝は神が見張っていることを、もう一つの幻である煮えたぎるなべは、神は真実な方であり、大学側の不正に対して、それを裁くため、妥協せず、煮えたぎり続けることとする。さらに、権力をもつ教皇も、豊かな知恵をもつ哲学者であるアリストテレスも、神の前では脇に払われることを告げ、インゴルシュタット大学の神学者たちが、神に反抗し、預言者や使徒達を追放しようとするなら、それは非難すべきことであると告げる。続いて、大学側の不正に対して、神はライオンやクマのように激怒し、彼らの愚かさや嘘と弾圧に対して、打ちのめすとし、神の言葉に反対する偽預言者たちに対して神が裁いてくださることの証言者として、預言者ホセア、エゼキエル、イザヤ、エレミヤを挙げている。

ここで、アルギュラは自分が今まで公然とものを言えなかったことを振り返る。それは、テモテへの手紙一2章の「女性は黙っているべきで、また、教会内では話してはならない。」とパウロが

告げているのに起因しているとする。この言葉によって、彼女はこれまで沈黙し自分を抑制し、受身のままであったことを告白する。しかし、イザヤ書3章の「私は彼等の統治者にするために子供達を送りたい。そして、女性に彼らを支配させよう。」や、イザヤ書29章の、「誤った者達は、彼等の心の中で、知ることを得、つぶやく者たちは法を学ぶであろう。」、また、エゼキエル書20章の「私は手を挙げて、彼らに反対して、彼らを撒き散らした。彼らは決して私の裁きに従わず、彼らは私の命令を退け、また、彼等の目は、彼等の父祖の偶像に目を引かれた。だから、私は彼らに命令を与え、よいものを与えなかった。そして、彼らは決して生きることができないというさばきを与えた。」、さらに詩編8編の「あなたは、子供や乳飲み子の口によって、あなたの敵のために、ほめることを定めてきました。」や、ルカによる福音書10章の「イエスは聖霊によって、喜んで、言われた。『父よ、私は貴方に感謝します。あなたが、知恵ある者からこれらのものを隠し、小さな者にそれらをあらわしました。』」、エレミヤ書3章の「彼らはすべて、小さい者から大きい者まで、私を知るであろう。」を挙げ、コリントの信徒への手紙一12章の「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言えない。」とマタイによる福音書16章でペトロの告白について、イエスが言った「人間があなたにこのことをあらわしたのではなく、私の天の父があらわしたのだ。」を用いて、すべてのキリスト者は平等に信仰を告白できるのであるとする。そして、もし誰も発言しない時は、神は女性や子どもたちや、はっきりと意見を言えない者や愚か者たちもその権利は与えられているのであって、そのことは聖霊がそうさせるのだと、今の彼女自身の行為を正当化させる。次にマタイによる福音書24章の「もし、邪悪な僕が仲間を殴り始めていて、その僕の主人が予想しない日、思いがけない時に帰ってきて、彼を厳しく罰し、偽善者達と同じ目に遭わせる。そこで泣き喚いて歯軋りするだろう。」を挙げて終末の前兆を示す。彼女は、この聖書箇所から、他人に偽善的に重荷を押し付け、立場を悪用して仲間を打ちたたいて好き勝手に宴会騒ぎをし、思いがけない時に帰って主人から厳しく罰せられることになって後悔する、この邪悪な僕達を聖職者たちにとたとえ、今、主の来臨が近づいているのに墮落している聖職者たちは気づいていないと警告する。また、アルギュラはインゴルシュタット大学に投資し支えてきたバイエルンの君候たちを真実に目覚めさせようと呼びかける。彼らに同情しつつも、彼らがインゴルシュタット大学の聖書学者たちに信頼し彼らを任命したことの責任と、また貧しい収入の臣民から取り上げた税によって大学が設立され維持されていることの認識を彼らに改めて自覚させ、そして君公達が神に立てられその任務を遂行する神への忠誠を思い起こさせる。

当のアルザシウスに関して、彼女は神がペトロを赦されたように、アルザシウスが嘘の証言をし、神に背いてしまったことに対して赦されることを促す。そして、彼女は「なぜなら、毎日、人は七回転び、再び自分の足で起き上がるから」とし、神は罪人の死を望むのではなく、その人の回心と命を望まれるのであると力強く告げる。そして、人が聖書ではなく力を用いて、議論する時、論争は簡単に説き伏せられることを指摘しながら、しかし、神は決してそのようなやり方に我慢はしないと主張する。

「マルティンが書いたものをすべて否定しなければならなかったことを恥じないのですか？」と

言及している点、彼女自身がルターの著作をよく読んでいることがわかる。「・・発行されようとしているモーセ五書がある。そのことはとるに取らないことなのか？」と記していることから、ルター訳のモーセ五書がこの時、印刷所の元にあるということまで知っていることがわかる。またアルギュラはカトリック教会支持のインゴルシュタット大学側に対して公然と自分が宗教改革者たちの著作を広範囲に読んでいることを告げている。

ここでアルギュラは自分が10歳の時、父から聖書を与えられ、以来、聖書に親しんできたこと、そして神の霊によって能力を与えられ、聖書の神の言葉を聞き取り、受け取ることが出来ることを告げている。コリントの信徒への手紙一9章のパウロの「私の力を濫用しないように、私はありのままの福音を説き明かします。」という言葉や「私は世に再び輝く光であるあなたに心から語ります。」や詩編118篇の「あなたの言葉が暴露される時、光が射ってきて、低い者にも理解を与えます。」や詩編36篇の「命の泉はあなたがたにあり、あなたがたの光に、私たちは光を見る。」や、ヨハネによる福音書2章の「神は人間について誰からも証ししてもらう必要がない。つまり、彼は何が人間の心の中にあるかをご存知だからである。」やヨハネによる福音書14章の「私は道であり、真理であり、命である。だれも、私を通らなければ、父のもとに行くことができない。」をあげて、彼女の聖書解釈の才能は神の霊により委ねられていることを聖書箇所から示している。そして、教会法の排他的で利己的利益のために他人を利用する命令とは神の言葉は違ふとし、マタイによる福音書24章の「天地は滅びる。しかし、私の言葉は決して滅びない。」やイザヤ書40章の「神の言葉は永遠に立つ。」を用いて、コリントの信徒への手紙二1章の「神の約束の言葉は、どんな「否」も除いた「然り」なのです。」をもって神の言葉の永遠性を告げている。アルギュラ自身、聖書の中で、究極的な師であるキリストがマグダラのマリアや井戸のところにいる若い女性のために祈っていることに励まされながら、彼女は「私はあなた方を前に出て、あなた方に聞きに、あなた方と議論することにしりごみはしない。」とし、彼女はたった一人で大学関係者の前に出頭し、その問題に弁明することができると公言する。その際、自分はルターを尊敬しているけれども、真の岩であるキリストに依拠して、公けに母国語で問題を討議し、また全神学者たちを相手にして堂々と弁明する、新しい公開討議を提案するとした。

最後に、コリントの信徒への手紙一2章<sup>11</sup>の「私は、信じる者にとって神の救いの力である、福音を恥としない。」と、マタイによる福音書10章の「あなたが引き渡されたとき、何を言おうかと心配してはならない。語るのはあなたではないのである。同時に、あなたは言わなければならないことを示されるであろう。そして、あなた方の父の霊が、あなたを通して語ってくださるのである。」を用いて、書簡の冒頭と同じように、信仰告白の注釈と、「私があなた方に書いてきたことは、女性の無駄話ではなく、神の言葉」として認められる必要があるとして、この手紙を締めくくっている。

以上、この書簡の概要を彼女の聖書の使い方を中心にして検討を試みた。この書簡の特筆すべき点は、第一に、これは、インゴルシュタット大学の学長や教授会メンバーに宛ててあくまでも個人的に抗議したものであって、彼女の背後に組織的なグループはないことである。彼女は自分自身の

ために、一人のキリスト者としての証言行為として、また、キリスト者としての倫理観に基づき、そうしなければならないという義憤を感じて書いたと思われる。「アダムのテーリンク宛ての書簡」において、彼女は、もともとは、この書簡は出版して広く公表するつもりはなかったと、主張している。もしそうだとすれば、彼女は、この書簡が公表され大きな反響があったことに非常に驚き、戸惑ったに違いない。他方、ひとりの女性が大学や、教会と国家への批判、討論で神学者達への挑戦という行為は当時としては画期的で、実際、多くの関心を持たれたにちがいない。

第二に、彼女は神学的基礎をもっているが、そこには限界がある点である。若い学生の公開裁判と教会権力と権威の誇示に対抗してアルギュラが異議申し立てをした書簡であるが、一方では、聖書の言葉を持ち、他方で、伝統とローマカトリック教会の教権に反対しながら、権威についての問題にのみ限定している。

第三に、文学的ではない点である。この書簡には序文がなく、だしぬけに始まり、結語がなく突然、終わっている。また、神学的問題から個人的問題へ、また実践的問題へと話題が錯綜している。この書簡は、彼女の止むにやめられない思によって、いくぶん、感情的に、急いで書かれものであったと思われる。しかしながら、そのために返って人々の心を惹きつけたのかもしれない。つまり、神学者が使う難解な専門用語によって書かれているのではなく、彼女自身の疑問や、忠言や、勧告や、突然の感情的叫びの訴えや、祈りを率直に、自由に述べられている点の人々の心に訴え、共感を得たと考えられる。また、一人称で書かれている点で、読者にアルギュラが直接に向き合って伝えているかのようで心に響くのであろう。すなわち、「私はあなたにお願いする。私にこのことについて答えて。」と言ったように、アルギュラ自身の、悩み、怒り、同情、希望や経験から語っているからである。

さらに重要な点は、彼女が聖書にすべての根拠を置き、そこに彼女の抗議文書を権威づけている点である。彼女はかなり効果的に聖書を利用し、また聖書と自分を同一視し、「神が申命記で言っているのです」とか、あるいは、「あなたは主がマタイで言われたことをご存知ないのですか」と言ったように、聖書の言葉が、読者に直接、訴えて響いてくるようなメッセージとなっている。

## 5. アルギュラの聖書理解を通して

上記で、アルギュラの「インゴルシュタット大学宛の書簡」を実際、検討してきたが、彼女は聖書を自由自在に使いこなすことに長けていたことがわかる。以下は、アルギュラの聖書理解と彼女の宗教改革運動の関係を考察しよう。

アルギュラの著作を読んだ同時代の人々は、彼女の聖書の理解の深さに、驚いたに違いない。それは彼女のパンフレットの増刷りやまたルターを初め、既出のようにオジアンダー、エーバリン、フープマイアー、ローツァー等、当時の蒼々たる宗教改革者たちが彼女のパンフレットを読み、そして彼女を支持していたことから窺える。また、彼女が関わった論争においてその聖書理解の力が発揮されたことも想像できる。しかしながら、彼女はどのようにしてその域に達したのだろうか。



まず、彼女が聖書を学ぶための周囲の環境・条件は一般的にみれば決して良いとは言えない。彼女が修道女であれば、聖書を学ぶことができるであろうが、修道女であるわけでもなく、ただの平信徒である。また、たとえば、ルターでさえも、『桌上語録』で「女は家政のほかのことをしゃべるとなると全然役に立たない。単語は知っているが、ものごとを理解してしゃべらない。たとえば政治のことなど、支離滅裂で、ときに誇張がある。どうも、女は家政向きに、男は政治や戦争や裁判沙汰などに向くように創られたらしい。」と称していたように女性に対してかなり偏見をもっていた時代である。彼女は聖書解釈の正式な教育を受けているわけでもなく、何の語学力も身につけていなかった。故に、彼女は聖書を独学で理解したとみなせよう。しかし独学とは言え、彼女の聖書への洞察力は、新鮮で独創的なものであり、しかも、彼女が思いつきで言っているのでは決してない。まず、このような聖書理解を作り出した背景には彼女の聖書に対する関心があった。それは既に述べてきたように、彼女が貴族で伝統的な敬虔な信仰生活を送っている家庭の中で成長したこと、また少女時代はミュンヘンの宮廷で彼女を指導したクニグンデ大后妃の深い信仰心が彼女の聖書理解への土台が築かれたことも重要な要因だったであろう。また彼女は当時流布していた新しい印刷物から得られるドイツ語で書かれた宗教書を十分に読みこなし、聖書理解を深めるために活用したことであろう。そのような聖書に対する素地があって、彼女の「時」が来たと言えよう。すなわち、ルターの運動が活発となって来た 1520 年代に、彼女も家庭を持ち、世間の様々な行方を見通せる 30 代前後の年齢に達して彼女のさらなる聖書への関心が高まったちょうどその頃、福音主義という新しい思想を、彼女は、教会の活動や大学の活動以外から一友人との会話や文通から、あるいは聖書の人文学者達や非公式な福音主義のグループから、また宗教改革者たちの説教から一知り、受け止めることができたと考えられよう。現にアルギュラはゼーホーフアの事件について、『ヴィルヘルム公爵への書簡』において「さて、ニュルンベルクのある人が、そのことがいやになって、秘密にしないで、事件がどのように取り扱われたかの記録を私に送ってきたのです。」とあるように宗教改革運動の情報は比較的入りやすい状況に身をおいていたようである。以上のことを考えると、アルギュラの聖書理解力は、少女時代から自然に身につけられる特別な環境にあったことと、独学に加えて、女性や平信徒にとって可能な最新の方法、現代風に言えば、「通信教育」というべき特別な手段によって、取得していったと考えられる。そして彼女は自主的、且つ意欲的に聖書の勉強に取り組み、さらに当時のルターや他の宗教改革者の著作によってその理解を深め、また、彼女の積極的性格や好奇心や情熱も手伝って、当時行われた数え切れないほどのカトリック教会と改革者たちの論争に関心を示し、彼女自身の行動へと発展していったのであろう。宗教改革運動の拡大の要因は、伝統的な方法で聖書を読むための教育を受けていない者が自国語で聖書を読むことが出来、自国語で説教を聞き、また宗教改革者たちの発言を印刷手段によって知るようになり、聖書自体を身近なものとして受け入れられるようになったことが大きな要因であったことがアルギュラを通して実証できよう。さらに言えば、平信徒で女性であるという彼女のステータスだからこそ、教会や修道院や大学といった特定の機関の中で聖書を学ぶという従来のやり方ではなく、もっと聖書を新鮮に生き活きと読むことができたとも言えよう。

次にアルギュラの聖書の用い方であるが、彼女の前提にあるものは聖書主義である。また、彼女の聖書解釈は説教的であり、聖書学的ではない。彼女は旧約・新約聖書をひとまとまりにして、その意味を理解している。彼女の文章を読むと、彼女の中で聖書の言葉は生きた血のようであり、彼女の優れた記憶力も手伝って、一つの事柄に対して、次々と適切な聖書箇所が旧新約聖書全体から引用されている。彼女は聖書を、神が、イスラエルの民とキリストに従う者に関わってくださる全記録であると理解し、生き生きとした物語として読む能力をもっていた。彼女は「私はこれをテキストに見つける。」とか、「私はそれを受け入れ」、「私はそれを理解する。」と述べているが、彼女の聖書への精通ぶりが窺える。彼女の生き方の指針は、すべて聖書に依拠しており、まさに聖書主義を地で行っていると言えよう。彼女は信仰や倫理を取り扱う全ての問題を伝統や習慣や教会の権威や、哲学や教会法の権威ではなく、全面的に聖書に権威をおき、聖書自体が神の命令を含んでいると理解していた。たとえば、彼女は「神の言葉の支配下においては、私もまた、卑しいものである。というのは、生ける水のみが私たちの渇きを癒すからである。」とし、バイエルンの大法官の言葉は、ローマ教会の権威と何世紀もの伝統のその重みを強調するものとされてきたが、アルギュラはこれらの権威を全く認めなかった。彼女はルター等宗教改革者たちと同様、反ローマ教会主義であった。彼女は「聖書の言葉をさらに理解できますようにと神に祈ると、私のところに飛んでくるようになる。」と記しているほど、どんな問題に関してもその解決を聖書の中に求めた。彼女は、同時代の人々に、聖霊によって聖書の言葉を理解し、聖書の言葉の引用を通して、神がいかにか語っておられるかを理解させるようと試みた。同時に、彼女は、テキストを巧みに操るとか、あるいは、引用を後からの思いつきとして付け加えるとかいうのではなく、神の言葉の力に信頼して彼女に抗している者たちに恐れず立ち向かっていこうとした。彼女は、預言者たち、使徒達、福音伝道者たちと同様、ルターやメランヒトンのような同時代の宗教改革者たちを、基本的に教師として見なししている。中でも、親交のあったルターの考え方は大きく彼女に影響を与えている。聖書のみ、聖書をそれ自体、最良の解釈者とする彼の理解は、彼女のものとなった。直面している問題を聖書に示されている解答が最良のものであるとして解決しようとしたルターの姿勢はアルギュラの姿勢の中にも活かされている。彼女は先ず、熱心な励ましの言葉を絶えず用いながら、教会と社会生活のあらゆる面に対する方針の書として、聖書を解釈している。彼女はたとえば、教会と国家の関係についても聖書から解答を求める。ヴィルヘルム公に対して、先ず公の仲裁によって、ゼーホーフが司教の毒手と火刑の炎から救われたことに対して感謝を表明している。その後ヴィルヘルム公とすべての行政官に対して、彼らが神から受けている権威は神の権威を侵害してはならないのであり、もし神の領域を侵すとき、彼らの土地は飢え、疫病、敵の侵入や死による災いを受け、死者は鳥や獣のえじきになるだろうと述べている。為政者は神の地上の代理人、僕であり、彼らは信仰の正しい実践を保ち、人々の安全と財産を守り、正義を行うという理解は、改革派の見解に近いようにも思われる。また、アルギュラは聖書を、とりわけ、信仰への告白の一つの挑戦として認めている。従兄弟のアダム・テーリングに宛てた手紙の中で、預言者や使徒達がその時代に公けに証言することを求められたが、同様に、キリスト者は皆、如何に犠牲をかけようとも、その時代の状況におい

て、預言者や使徒達の姿勢に従わなければならないとした。故に、彼女はエレミヤやユディトやパウロに共感し、たとえば、「私は自身のためにイザヤ書3章を必要とします。」「私は預言者エレミヤと共に泣きます。」「パウロは私を許す。」「私はパウロがしたように話す。」と述べている。彼女にとって、聖書は一つの書かれた文書というのではなく、神の言葉が生き生きと彼女自身ために述べられたものであった。すなわち、聖書は「神の口」に対するイスラエルの民の返答の一つの記録として、それは、また、私たちが口を開くための一つの呼びかけであると理解した。すなわち、神の言葉は生命を創造し、混沌から秩序を創造し、さらに死人を生き返らせる力をもつのであり、一過的なこの世界において、聖霊の導きにより、永遠なる神の言葉からなる聖書を読むとき、実を結ばないものは決してないと彼女は理解したのである。

他の宗教改革者と同様に、彼女も、今、現在の状況を聖書を巧く用いて比較や二元論で示そうと努めている。たとえば、ランツフートのヨハネスのような人をデボラやヨエルやユディトのような女性に激しく反対する者とイメージしている。また教会法の学者や詭弁家の神学者たちを、ファリサイ派の人々とみなしたり、神の言葉を抑圧する世俗の暴君たちを、ファラオやホロフェルネスとみなしたりしている。また教皇の命令は、パウロによって弾劾される人間の知恵の鏡として示している。彼女の聖書の用い方は巧妙であったため読んでいる者、聴いている者に、敵対する者がなにかを明確に出来たと考えられる。また、アルギュラはヨハネ福音書がしばしば、限定する二元論のカテゴリーを用いながら、黙示録的に解釈した。つまり、光と闇、真実と虚偽、神と悪魔というように二元論を用い、天国と地獄は生き生きとした現実であるとし、腐敗した虚偽のローマ・カトリック教会は神の真実によって、その罪が暴かれ、滅ぼされるであろうとする。この二元論を用いながら、マタイによる福音書24章やペトロの手紙一5章のような文言に基づき、終末を強調している。すなわち、彼女は「もしも、神の御心を心にとどめなければ、疫病、大災害、トルコ人による来訪があるだろう」と記している。天国についての思いが、彼女にとって個人的な強い慰めとなる一方、最後の審判の永遠の苦難は、ファリサイ派のものであり、腹黒い偽善者、フランシスコ修道会のために用意されていると信じていた。他人へ奉仕するというのを忘れてしまった、権力を渴望している聖職者達は、世の人々からの激怒を呼び起こし、憤激は全土を駆け抜けるとし、二元論を用いながら聖書を闘争的に解釈していると言えよう。

最後に彼女にとって聖書が果たした最大の意義であるが、それは聖書が彼女を宗教改革運動へ奮い立たせたことである。聖霊が一人の女性を用いて、聖書の一つのテキストから次のテキストへと導き、そして、聖書全体を理解できるまでになり、インゴルシュタット大学の蒼々たる聖書学者たちとの討論に挑む者となったことは驚くべきことである。しかも、女性は霊的な問題を話すことを禁じられているとされてきた従来の聖書解釈を、彼女は再解釈し直した上で、自分が神によって危機の時代に召されてきた代々の女性預言者の一人であると自分自身を奮い立たせて論客たちの前に立つことを決意したのであった。彼女の鍵となる聖書箇所は、マタイによる福音書10章である。彼女は、この聖書箇所から、キリスト者は誰でも、男性であれ女性であれ、たとえ、苦しくとも、あるいは、困難でも、信仰を告白する義務をもっていると理解した。旧約聖書のデボラ、ヨエル、

エステル、ユディトといった極端に戦闘的な女性と新約聖書のマリアやマルタの姉妹、イエスと共にいるほかの奉仕と慈愛に満ちた女性達を味方に付け、彼女は自分の直面している事柄に勇気と確信をもって立ち向かったのである。聖書主義に基づく彼女には伝統的女性聖人たちは一切、必要がなかった。イエスは女性に教えることを恥じず、積極的に関わっておられるし、イエスの教えは一般的概念すべてにひっくり返すという発想の転換がみられるが彼女の聖書解釈はそこへ到達したのではないだろうか。特に、この宗教改革時代において男性たちの活躍が賞されるが、神の聖霊はすべての肉である人間にふんだんに注がれるのであって、女性の「無駄話」として、男性に一般的に見られていても、神の言葉の媒体になるのだということをアルギュラは堂々と示したのである。

## 6. さいごに

本稿ではアルギュラと聖書の関係について見てきたが、彼女が活動した1520年代は、まだ、宗教改革運動は始まったばかりであった。そして、農民たちを扇動して巻き起こす農民戦争は間近であった。そのような時代にあって、アルギュラは、ルター等の宗教改革文書を読み、ひとりのキリスト者として目覚めた。彼女は聖書の中に神の声を求める中で、彼女個人の現実の生活と共に、教会の現状と社会の大変動を直視し、権威に対して社会の不正、矛盾に異議申し立てをした。まさにアルギュラは16世紀の女性政治記者として行動した。その行動は、彼女自身が、「…もし、あなたが提示するなら、従順な子である私は、あなたのうなづきに従いたい。」と述べているように、神の靈感を感じ、心が動かされ、神の前では男性も女性もない一人のキリスト者であることを確信したことに裏打ちされたものだったと言えよう。聖書は彼女の生き方をしっかりと支え、そして宗教改革者としての行動を支える掛け替えのない盾であり、道しるべであった。

### 【注記】

1. 尚、アルギュラに関する論文は日本では拙著のもののみであり、また彼女に関する研究では聖書と彼女に関するものを論じたものはない。
2. ドイツ語の方言は、大きく分けて北部方言（低地ドイツ語:Niederdeutsch）と中部・南部方言（高地ドイツ語:Hochdeutsch）に分けられる。現在標準ドイツ語と呼ばれるものは、書き言葉としては主にチューリンゲン地方などで話されていた東中部方言（チューリンゲン・オーバーザクセン方言）を基にした言葉で、ルターのドイツ語聖書などの影響によって標準語の地位を獲得した。このため、「高地ドイツ語(Hochdeutsch)」という言葉は「標準ドイツ語」という意味でも用いられる。
3. たとえば、すべてのドイツ語聖書において、『ウルガータ』聖書の aquilo、北、北風を、真夜中 *mitternacht* と翻訳したり、ヒエロニムス聖書の序文が個々の書に含まれていて、これはラテン語を読めない平信徒の読者には、そのまま受け入れたことが想定される。
4. たとえば、『インゴルシュタット大学宛ての書簡』の中で「マルティンやあるいは、メランヒトンによって書かれた著作は、神の裁きと正義を私に語り熱心に説いています。」と述べている。
5. たとえば、『インゴルシュタット大学宛ての書簡』の中で「ゼーホーファがマルティンによる原典新約聖書のドイツ語訳を否定しなければならなかったことをあなた方は恥じないのですか？」と述べている。
6. たとえば、『インゴルシュタット大学宛ての書簡』で「また、これからルターが発行しようとしているモーセ五書があります。」と述べている。
7. このすばらしい例のひとつは、「コリントの信徒への手紙」二一章19節である。すなわち、「神の言葉はいかなる『否』にも許さない『然り』であります。」と。中世後期の聖書におけるこの節の訳は、間の抜けたものであり、またあいまいなものであったようだが、ルター版はかなり異なり、テキストに接近して読んでいる。

8. ここでは、Wie eyn Christliche//fraw des adels/in Beiern durch//jren in Gotlicher schrift/wolgegründ//ten Sendtbrieffe/die hohenschul zu Jngold=stat/vmb das sie einen Euangelischen Jung//ling/zu wydersprechung des wort//Gottes betragt haben//straffet.(Nürnberg:Friedrich Peypus 1523) 7 Bl.4°  
Matheson,Peter, Argula von Grumbach. A Woman's Voice in the Reformation, Edinburgh 1995,pp.56-95  
Matheson,Peter(ed.),Arugula von Grumbach:Shriften,Heidelberg,2010,pp.63-75,162-164 を参照している。
9. ヨハン・エック (Johann Maier, Eck : 1486 ~ 1543) はカトリック神学者であり、インゴルシュタット大学で神学教授となりルター論敵であった。1519年のライプチヒでの討論でエックはルターが異端者であることを証明した。
10. 「アルザシウス・ゼーホーファによる無効にされ否認された条項」に添えられたアルザシウスの誓約書にエッタル修道院と記されている。
11. アルギュラは書簡の中で、コリントの信徒への手紙一2章としているが、ローマの信徒への手紙1章16節の意味であると思われる。

## 【引用】

(1) Peter Matheson ed.,Argula von Grumbach: A Woman's Voice in the Reformation,1995,p.86

(2) 塩谷鏡、『ルター聖書』、大学書林、1983、189頁

## 【一次史料】

Wie eyn Christliche//fraw des adels/in Beiern durch//jren in Gotlicher schrift/wolgegründ//ten Sendtbrieffe/die hohenschul zu Jngold=stat/vmb das sie einen Euangelischen Jung//ling/zu wydersprechung des wort//Gottes betragt haben//straffet.(Nürnberg:Friedrich Peypus 1523) 7 Bl.4°  
Matheson,Peter, Argula von Grumbach. A Woman's Voice in the Reformation, Edinburgh 1995  
Matheson,Peter(ed.),Arugula von Grumbach:Shriften,Heidelberg,2010  
Ein Christenliche schrift//ainer Erbarne frawen/vom [m] Adel//darin [n] sy alle Christenliche stendt//vn [d] obrikeyten ermant/bey der//warheyt vnnd dem wort//gottes zu bleiben vn [d] sol//lichs auss Christlicher//pflicht zum ernst-//lichste [n] zu handt//haben.//Argula Staufferin.//M.D.XXiiij.//Actuum 4.//Richtent jr selb/ obs vor got recht//sey das wir ewch meer gehorsam//sein sollen den Gott. (München:Hans Schoser 1523)8 Bl.,TE,4°  
Dem Durchleüchtigen Hochge//bornen Furster vnd herren/Herr [e] n Jo=//hansen/Pfaltzgrauen bey Reyn//Hertzoge [n] zu Beyern / Grafen// zu Spanhaym etc.Mey=//nem Gnedigisten//Herren.//Argula Staufferin.//(Augsburg:Philipp Ulhart d.Ä.1523?)3Bl.,4°  
Ermanung an den//Durchleuchtigen hochge//bornen fürsten vnnd hern//herren Johannsen Pfaltz//graue [n] bey Reyn Hertzoge [n] //in Bayrn vnd Grauen zu//Spanhei etc.Das seyn//F.G.ob dem wort gottis halten wöll.Von einer//erbaren frawen vom//Adel sein [n] gnaden//zugeschickt.//Argula von Stauff.// (Bamberg:Georg Erlinger 1523)2Bl.,TE(mit Jahreszahl), 4°  
Dem Durchleutigiste [n] //Hochgebornenn Fursten//vnd herren/Herr [e] n Jo=//hansen Pfaltzgrauen// bey Reyn/Hertzogen//zu Beyern/Gra=//uen zu Span=//heym.etc.mey//nem Gnedi=//gisten herre [n] //Anno.M.C.xxiiij.//Argula Staufferin.//(Erfurt:Wolfgang Stürmer 1524)2Bl.,T.E, 4°  
An denEdlen//vnd gestrengen her //ren/ Adam vo [n] Thering// der Pfaltzgrauen stat//halter zu Newburg// etc. Ain sandtbriff//vo [n] fraw Argula// vo [n] Grunbach//geborne vo [n] Stauff=// en.5Bl.,TE,4° (Augsburg:Philipp Ulhart d.Ä.1523)  
Ein Sendbrief der edeln// Frawen Argula Staufferin/ An die// von Regenßburg.//M.D.XXiiij.2 Bl., 4 ° (Nürnberg:Hans Hergot 1524)  
Eyn Antwort in//gedichtß weiß/ ainem d(er)//hohen Schl zu Jngol=//stat/auff ainen spruch/ // newlich vo(n) jm auß//ga(n)gen/ welcher// hynde(n) dabey// getruckt // steet.// Anno. M.D.XXiiij.// Rom(er). x.// So mann von hertzen glawbt/ wirt// man rechtuertig/ so man aber mit de(m)//mundt bekennet/wirt mann selig.// Argula von Grumbach/ //geboren von Stauff.// (Eyn Spruch von der// Staufferin/ jres Dispu=//tierens halben.//)(Nürnberg:Hieronimus Hölzel 1524)14 Bl.,4.°

## 【二次史料】

塩谷鏡、『ルター聖書』、大学書林

徳善義和(編)『マルチン・ルター —原典による信仰と思想—』リトン 2004年

R. ベイントン 『宗教改革史』出村彰(訳)新教出版社 1966年

『ルター』(世界の名著23) 松田智雄(編)中央公論社 1979

